

6.1 カリキュラムの編成

目標群

2005年度以降に設定した目標

3. 新たな広領域の履修コース設定の可能性を検討する。→「現在の広領域の履修コースの実情と問題点を検討する。」に変更。

進捗状況報告

【6.1.1 教育課程】 【6.1.2履修科目の区分】 【6.1.3 授業形態と単位の関係】

2003年度のカリキュラム理念を受け継ぎながらも、2008年度入試から文化歴史学科が1年次で専修配属決定となることを念頭に置いて、カリキュラム委員会・総合科目等検討ワーキンググループを中心として、学部全体における共通科目と学科科目双方の必要単位数の見直しを図っている。

学生の履修実態調査については総合科目・入門科目についての調査を開始しており、各科目における1年生履修者数と2年生以上の履修者数との比率等にも目を向けて、よりよい履修モデルの設定を目指しての検討を行っている。あわせてこれらの科目が特定の曜日と時限に集中しがちな問題点が明らかになってきたため、それを事前に調整していく態勢作りにも取り組みつつある。

広領域の履修コースについては広領域運営委員会で「言語科学コース」のプログラムの実情について検討を積み重ねてきたが、この期間にあって一定の成果を挙げてきたことに鑑み、2008年度以降は「言語科学」の中核をなす科目を関連専修のカリキュラム内に加え、領域横断的なカリキュラムの存在を引き続きアピールしていくことが確認されている。

【6.1.5 開設授業科目における専・兼比率等】

キリスト教科目・人文演習・入門科目・演習科目・卒業論文のように、文学部のカリキュラムを系統として見た時にその中核となるものを専任教員の担当率100%で提供する方針は維持されている。一方、学科科目中の専門講義科目・特殊講義科目の専任教員担当率はそれぞれ61.3%・41.0%（2007年度春・秋学期計）である。科目の性質上、非常勤講師と連携していく必要があり、そこでの専・兼比率の適切性についてはカリキュラム委員会や各専修会議を中心にして随時検証している。

学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

なお、広範で多様な学問領域に触れることを目的とする総合科目の運営については、現在学部提供と学科提供の二通りの行き方をとっているが、それらがさらに統合的で協同性の高いカリキュラムの実現形態に近づくことを目指して、授業内容、受講者数、担当者の連絡体制の整備といった点についての検討を、カリキュラム委員会・総合科目運営委員会を中心として随時行っている。

学内第三者評価

高度な専門性と、多様な学問領域での幅広い教養を合わせ教育するという目的に沿って、継続的に改革が行われていることは評価される。

ただ、現在行われている必要単位数の見直しは、専門性を高めることを主な目的とするものと思われるが、広範で多様な学問領域に触れ、幅広い教養をそなえる教育目的を達成する方法についても明示することが望ましい。

なお、特別委員からは以下の意見があった。

・きめ細かく問題点を洗い出して、改善に向けた努力がなされていると判断できる。履修実態調査も始まり、認証評価で指摘された時間割上の問題も改善に向かうものと期待される。